それは、防空のための要塞としてつくられた

現在は西淡路にひっそりと残る高射砲台だが、
昭和20(1945)年当時はれっきとした軍事施設だった。
その頃の姿を想像してみよう。

このページのイラストは、大阪市教育委員会発行「西淡路(高次)高射砲陣地調査報告書」、佐山二郎「高射砲　日本の陸戦兵器徹底研究」を参考資料として作成したイメージです。

東淀川区に残る戦争遺跡

高射砲台(こうしゃほうだい)

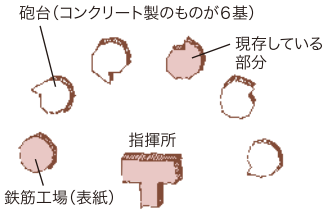
コンクリートを流し込んだ型枠の跡が荒々しく残る表面に、鉄筋が露出した柱、放射状に広がる梁(はり)…。表紙の写真は、米軍機を撃ち落とす高射砲を配備するために旧日本軍が作った砲台だ。昭和18(1943)年ごろから整備され、当時は「国次高射砲陣地」と呼ばれた。それらが今も東淀川区に残っている(平成27年現在2基)というから驚きだ。今回撮影した写真の一基は今も鉄筋工場として使われている。

12角形の高射砲台は直径約10m、高さ4.5m。陣地には鉄筋コンクリート造2階建T字型の「指揮所」を囲むように6基の砲台が半円形に並べられていた。それぞれの砲台の上には八八式七糎(センチ)野戦高射砲が1台ずつ置かれ、ここから米軍機を狙い撃ちしたのだという。

気になるのはその性能。高射砲の最大発射速度は1分間に15発で、最大射高は9,100mと資料にあるが、実際の有効射高は4,000m程度だったといわれている。日本軍の兵器に詳しい関西学院大学文学部の高岡裕之教授によると、「高射砲は航空機の進行方向を予測して発射するため、命中させるのは至難の業でした。さらに、6月7日の米軍機は日本軍の予想を越える高さを飛んだため、視界が悪いほど命中率は下がりました」。平成18年発行の「西淡路(国次)高射砲陣地調査報告書」掲載の当時の米軍のレポートにも、晴れれば地上からの攻撃を受ける機体が増え、曇れば被害が少なかったことが書かれている。

発射のための見晴らしを確保するために地上から突き出るように作られた都市型の高射砲台。丈夫に作られたせいか、わずか数年の兵器としての寿命を終えてから、工場や住宅として「余生」を過ごしてきた。市内に約300基あったが、同様の高射砲台は次々と姿を消していて、構造がほぼ完全な形で残っているのはここだけといわれている。

高射砲陣地の配置



砲台中央部分の兵室だった所には、鉄筋の加工機械が置かれている。

平成25年に取りこわされた砲台の外観

【キーワード】高射砲台(こうしゃほうだい)　敵の航空機を地上から撃ち落とすために作られた高射砲を乗せる砲台のこと。